
寄贈品コーナー

新顔の帰化植物

(2000年2月16日～3月30日)

道ばたでよく見かける植物なのに、図鑑で調べても名前が分からない。そんな経験をお持ちの方も多いのではないのでしょうか。多くの場合、そうした種類は外国から入ってきて野生化した帰化植物、それもまだ図鑑で紹介されていない新顔の帰化植物であることが多いのです。今月の寄贈品コーナーでは、そうした種類を中心に、最近増えている帰化植物の代表的なものを紹介します。

図に示したものは、ミチタネツケバナという種類で、数年前に存在が気づかれたものですが、いつの間にか増えており、平塚でも市街地の路傍のあちこちで記録されています。水田などに生えるタネツケバナとそっくりですが、花の時期にも根元に四方に広がるロゼットと呼ばれる葉を持っているのが特徴です。また、細かい点では、種子をルーペで見ると、その縁に白っぽい翼があることも見分けに役立ちます。別の帰化植物にコタネツケバナというのがあり、これもミチタネツケバナによく似ていますが、茎や葉に毛が生えている点で見分けられます。ミチタネツケバナもコタネツケバナも原産地はヨーロッパだそうです。

また、特に近年増えてきた種類としてはウラジロチチコグサをあげることができます。チチコグサの仲間には帰化植物が多く、平塚でもチチコグサモドキ・タチチチコグサ・ウスベニチチコグサが記録されています。ウラジロチチコグサは、これらの種とは、葉の裏が白く、深緑の表面とはっきりしたコントラストがあることで見分けられます。一昔前にはチチコグサモドキが多かったのですが、ここ十年ほどの間にウラジ



ロチチコグサが急激に増え、今では勢力が逆転したように感じられます。帰化植物の世界でも栄枯盛衰があるのです。一方、在来種のチチコグサはすっかり少なくなってしまいました。

帰化植物が日本に入ってきたルートにはいろいろなものがあります。羊毛や穀物などに混ざって種子が入り込んだ密航型のものはその代表です。近年では、花壇に栽培されたものが逃げ出して野生化するケースが目立っています。川原などで、コスモスやトレニア(ハナウリクサ)などを見かけるのは、そうした起源のものです。

帰化植物は在来の植物に悪影響を及ぼすこともあり、またもともとの景観を変えてしまうようなこともある問題児ですが、都市化に抗して勢力を伸ばしている興味深い植物でもありません。関心を持ち、その動向に気をつけていく必要があるでしょう。
